

論文審査の結果の要旨

報告番号	乙 保 第 2 号	氏 名	千 葉 進 一
審査委員	主 査 安井 敏之 副 査 葉久 真理 副 査 谷岡 哲也		

題 目 Clinical correlates associated with basic ability of social life in schizophrenia inpatients

入院中の統合失調症患者の基本的な社会生活能力に関連した臨床要因

著 者 Shinichi Chiba, Masahito Tomotake, Masatomo Aono, Hidefumi Toshimitsu, Tetsuro Ohmori

2016年1月発行 Open Journal of Psychiatry, Vol.6, No.1, 71~75ページに発表済

要 旨 統合失調症患者の社会生活機能に影響を及ぼす要因を明らかにすることは重要な課題である。本研究は、入院中の統合失調症患者において、退院の指標となる基本的な社会生活能力に関連する臨床要因を明らかにすることを目的として行われた。対象は、DSM-IV（アメリカ精神医学会）の診断基準で統合失調症と診断された50人の入院患者（53.1±12.1歳）であった。社会生活能力は Rehabilitation Evaluation of Hall and Baker（以下、REHAB）、認知機能は Brief Assessment of Cognition in Schizophrenia（以下、BACS）、臨床症状は Positive and Negative Syndrome Scale（以下、PANSS）と Calgary Depression Scale for Schizophrenia、薬原性錐体外路症状は Drug-Induced Extrapyrimal Symptoms Scale（以下、DIEPSS）を用いてそれぞれ評価した。回収したデータは SPSS を用いて記述統計、およびスピアマンの順位相関分析を行った。倫理的配慮については、対象者に口頭と文書で調査目的・方法、匿名性と守秘の保証、参加や中途拒否の権利、公表方法などを説明し書面にて同意を得て行った。本研究は徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号：1631）。

REHAB の deviant behavior score は、PANSS の positive syndrome score ($r = 0.55, p < 0.01$) と有意な相関を示し、REHAB の general behavior score は、PANSS positive syndrome score ($r = 0.28, p < 0.05$)、PANSS negative syndrome score ($r = 0.53, p < 0.01$) および DIEPSS score ($r = 0.43, p < 0.01$) と有意な相関を示した。しかし、REHAB と BACS のスコアには有意な相関は認められなかった。

本研究により、統合失調症入院患者の基本的な社会生活能力に対して認知機能は影響を及ぼしていないことが示され、同時に、基本的な社会生活能力には陰性症状と薬原性錐体外路症状が関連していることが明らかになった。

以上の結果は、入院中の統合失調症患者が、退院して地域社会への復帰を目指すためには、認知機能の強化を目指すよりも、陰性症状や錐体外路症状の改善が優先されることを示唆しており、今後の統合失調症入院患者の地域社会への復帰に向けた取り組みに与える影響は大きく、有意義な内容である。その社会的意義は大きく、博士の学位授与に値すると判定した。